

川崎市の市民の花と木

吉田 三夫*

The flower and tree of citizen in Kawasaki city

Mituo YOSHIDA*

I はじめに

川崎市における市民の花はツツジ、市民の木はツバキである。これらは、昭和49年(1974)に市制50周年を記念して市民投票によって選ばれた。選定基準になった点は市民にゆかりの深いもの、親しみのあるもの、各家庭に植栽されるにふさわしいもの、病害虫に強く都市緑化にふさわしいものであった。この他に区の花と木が選ばれている。例えば多摩区の花はモモ、スマイレ、木はナシ、ハナミズキ、宮前区の花はコスモス、木はサクラ、高津区の花はスイセン、木はウメ、中原区の花はパンジーというようにである。

ここでは区の花と木を除外して市民の花と木について触れたい。

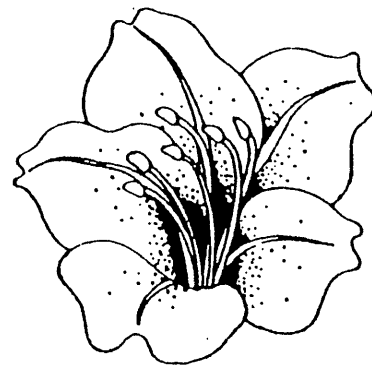
II ツツジ

1 ツツジの仲間と特徴

川崎市のツツジの説明には品種が豊富で移植も容易なことから、鑑賞用として広く栽培されているほか、緑化用としても公園、家庭などに植栽されているとある。ツツジ科の中にツツジ属がある。学(属)名は *Rhododendron* L. で牧野(1974)はロドは赤を意味し、デンドロンは木を意味しているので、赤い花をつける木を表しているとしている。他の解釈もあるようだ。ツツジという和名はないので、ツツジと言った場合、ツツジ属の植物を指していると考えられる。この属はシャクナゲ類とツツジ類に分けられる。シャクナゲ類は常緑で、ツツジ類は半落葉である。園芸的にはツツジ類は、ツツジ類が咲き終わった6月頃に咲きはじめるサツキ類と区別されている。だから、ツツジと言った場合、ツツジ類、シャクナゲ類、サツキ類を指していると考えてよい。後述するが、ツツジ属の自生種は元より園芸種もかなりの数に上る。この属の植物は基本的にガクは5、花冠裂片は5、おしべは5かまたはこれらの倍数である。勿論、変異がある。

ツツジは市民の花としてデザイン化されている。花冠裂片は5裂片として描かれていてガク片は見えていない。おしべは6、めしべは描かれていない。デザイン化されたものであるため、これはこれでよいのであるが、分類学的には、基本的には、おしべは5が望ましい。前述したように其本数は5かこの倍数であるからである。

図1



市民の花 ツツジ

2 市民にゆかりの深いツツジとは?

市民の花の選定基準に市民にゆかりの深いものがある。この観点から、川崎市に自生しているツツジは何かというと現在ではヤマツツジしかない。ヤマツツジは花冠裂片5、ガク5、おしべ5、めしべ1で、オレンジ色をしており、多摩丘陵の日当たりのよい斜面などに生育している。安原(1992)は写真集に黒川のミツバツツジを掲載している。そしてかつては地元の人がレンゲツツジも生育していたと言っていたと述べている。ミツバツツジがあればトウゴクミツバツツジも生育していたと考えられる。ミツバのツツジは葉が3輪生するのが特徴で、ミツバツツジはおしべ5、トウゴクミツバツツジのおしべは10である。花が綺麗なために園芸品として植木屋などで売られている。更に川崎市生まれの植物学者である原(1936)は向ヶ丘村にレンゲツツジが生育していたとしていたのでかつては川崎市にレンゲツツジが生育していたと言っている。花のガク、花冠裂片、おしべ、めしべなどの数はヤマツツジと同じである。神奈川県では絶滅種である。川崎市に自生している又は自生していたツツジ類、ヤマツツジ、ミツバツツジ、トウゴクミツバツツジ、レンゲツツジはゆかりの深い花と言える。

神奈川県に自生しているロドデンドロン、ツツジ属の仲間を挙げてみるとバイカツツジ、ハコネコメツツジ、サツキ、ヤマツツジ、ミツバツツジ、トウゴクミツバツツジ、キヨスミミツバツツジ、ゴヨウツツジ、ヒカゲツツジであり、ヤマツツジを除いた多くは丹沢などの山地に生育している。これらもゆかりのある植物と言える。

*川崎市青少年科学館

3 なぜ園芸品種がそんなに多いのか？

先ず花が綺麗なので人々を魅了することが挙げられる。また突然変異が起こりやすく、自然に雑種ができること、交配し易いことなどが考えられる。

サツキ類はツツジ類の花期が3～4月なのに対して5～6月である。サツキ類とツツジ類の違いは花期にある。サツキ類の園芸品種（品種とは基本種に対して1～2の形質の違いがあるもの、例えば花色が違うなど。これ以上の形質の違いがあれば変種扱いになる）の原種はサツキと沖縄産マルバサツキで、江戸時代に既に雑種及び園芸品種作りがおこなわれている。一方、1800年代にヨーロッパで東洋産のツツジ類を用いて品種改良がおこなわれた。これらをアザレアと呼んでいる。またアメリカでもアザレアの品種改良が行われている。これらのアザレアが明治時代に輸入されサツキ類と結びついた。サツキ類の中にツツジ類も改良種として入っていることになり、サツキ類は現在2000品種とも5000品種とも言われている。サツキ類は造園樹木の中では生産数が最も多く、1986年までに日本で約1億本生産されているという。

ツツジ類のひとつにクルメツツジがある。クリシマ（鹿児島県の霧島の山中に生育）とサタツツジ（鹿児島県大隈半島と薩摩半島に生育）を原種に久留米藩の家人によって品種改良された園芸品種群をクルメツツジという。今日までに700の品種が命名されているが、現在まで残っているのは300品種である。

クルメツツジは1918年に50品種がアメリカに渡り、現在でもアメリカ初めヨーロッパでも庭木用として栽培されているという。

もうひとつヒラドツツジがある。ヒラドは江戸時代の貿易港の平戸である。外国の珍しい植物が平戸に集まってきた。沖縄産のケラマツツジや中国産のタイワンヤマツツジなど、これらに日本産のモチツツジ（近畿地方、東海地方、四国に成育）、キシツツジ（九州、四国に生育）などが武家屋敷に植栽されていて、自然雑種が産まれた。突然変異などの変異個体も生じ300品種全体をヒラドツツジと呼んでいる。

この他にシャクナゲ類の園芸品種も50品種以上あるらしい。

4 世界的な花 ツツジ

このようにみえてくると、ツツジ属の園芸品種が日本はもとよりヨーロッパ及びアメリカでも作られていて、これらが更に交じり合って品種をつくっていることが分かる。日本人及び外国人にも愛好されており、世界的な植物である。ツツジ属の園芸品種が世界に何品種あるのかおそらく判然としていないように思う。

市民の花の選定基準、ゆかりが深い、親しみがある、植栽しやすい、都市緑化になるを全てみたくしており、国際都市・川崎市の市民の花にツツジはふさわしい花であろう。

III ツバキ

1 川崎市に自生するツバキ

ツバキと言った時、ツバキの仲間全体を示す時とツバキ（＝ヤブツバキ）1種を示す時がある。日本に自生するツバキは青森県（北限）から九州にまで生育するヤブツバキ、日本海側の東北地方から北陸、山陰地方、いわゆる雪深い山中に生育するユキツバキ、屋久島に生育しているヤクシマツバキが知られている。だから市民の木として1種挙げると言われればヤブツバキということになる。植物社会学でも当地はヤブツバキクラスに入っている。

2 ツバキの仲間

分類学的にツバキの仲間を細分するとツバキ科ツバキ属ツバキ亜属のツバキ節とサザンカ節に分かれる。ツバキの仲間にはサザンカも入ってくるようになる。サザンカは山口県、四国の西南部、九州北部から沖縄県に自生している。

一方、トウツバキが江戸時代中期に日本に渡来していた。トウツバキの自生が中国で確認されたのは近年になってからだという。すると日本ではヤブツバキ、ユキツバキ、トウツバキ、サザンカがツバキの仲間になり、これらの間で種間雑種が作られ、品種が作られていったことになる。無論、西欧や米国に自生しないツバキの仲間はこれらの国に輸入され、品種が作られ日本に逆輸入されている。今やツバキは世界の名花になっている。

日本産のヤブツバキ、ユキツバキの子房に毛がなく、トウツバキの子房には白い長い毛があり、サザンカの子房には細かい毛がある。どの系統のツバキなのかは子房の毛が決めてになるだろう。ワビスケというツバキの品種群が50種ほど知られている。子房の毛の形質からトウツバキ系と言われている。

3 品種育成の歴史

ツバキを愛でる歌は万葉集にもあるので、古くから親しまれていたのだろう。ツバキの園芸栽培が盛んになったのは室町地代の末期で立会いや茶会で用いられたという。1615年頃の京都では約100種類の品種ができていた。江戸時代になると大名から庶民までツバキを愛でようになり、ヤブツバキとユキツバキの雑種が多く作られた。元禄時代に江戸のツバキは飛躍的な発展をとげ、229品種に及んだ。接木及び挿し木で増やして中国に桶で輸出する程だった。江戸で発展を遂げたツバキを江戸ツバキ、京都で発展したツバキを京ツバキといい、京ツバキの中にワビスケなどがあるのでトウツバキの系統が入っていることが分かる。北陸地方にはユキツバキとヤブツバキの雑種であるユキバツツバキの品種群がある。これらの品種の名は日本の古典、源氏物語謡曲などから採られているという。

シーボルトが長崎から持ち帰った4品種は西洋にツバキブームを巻き起こす一因になった。

中国でのツバキ、トウツバキの栽培史は1千年に及ぶというが、アメリカでの品種作りが最高潮になったのは戦後15年程たった1960年代だった。これらのツバキは日本にも入ってきている。

4 椿油

ツバキの黒い種からしぼりとった油を椿油といい、女性の髪に用いたり、食用にもなり、刃物のさび止めにもなっている。サザンカの種からも採れる。

椿油を採る習慣は外国、特に中国にもある。中国はツバキの仲間が約200種と最も多いが、採油用として広く栽培されている。

このように見てくると、ツバキもまた世界の名花として広く知られ、川崎市の市民の木にふさわしい。

文 献

- 神奈川県植物調査会編(2001)神奈川県植物誌(2001).
p732,pp1098-1101.神奈川県生命の星・地球博物館
牧野 富太郎(1974)牧野新日本植物図鑑. p392,pp453-
469. 北龍閣
佐竹 義輔監修(1974)牧野富太郎植物記. pp34-40,
pp51-62. あかね書房
塚本 洋太郎総監修(1999)園芸植物大事典. pp1434-
1480, pp1483-1508. 小学館



現在川崎で見られるヤマツツジ



現在では見られないミツバツツジ



現在では見られないレンゲツツジ